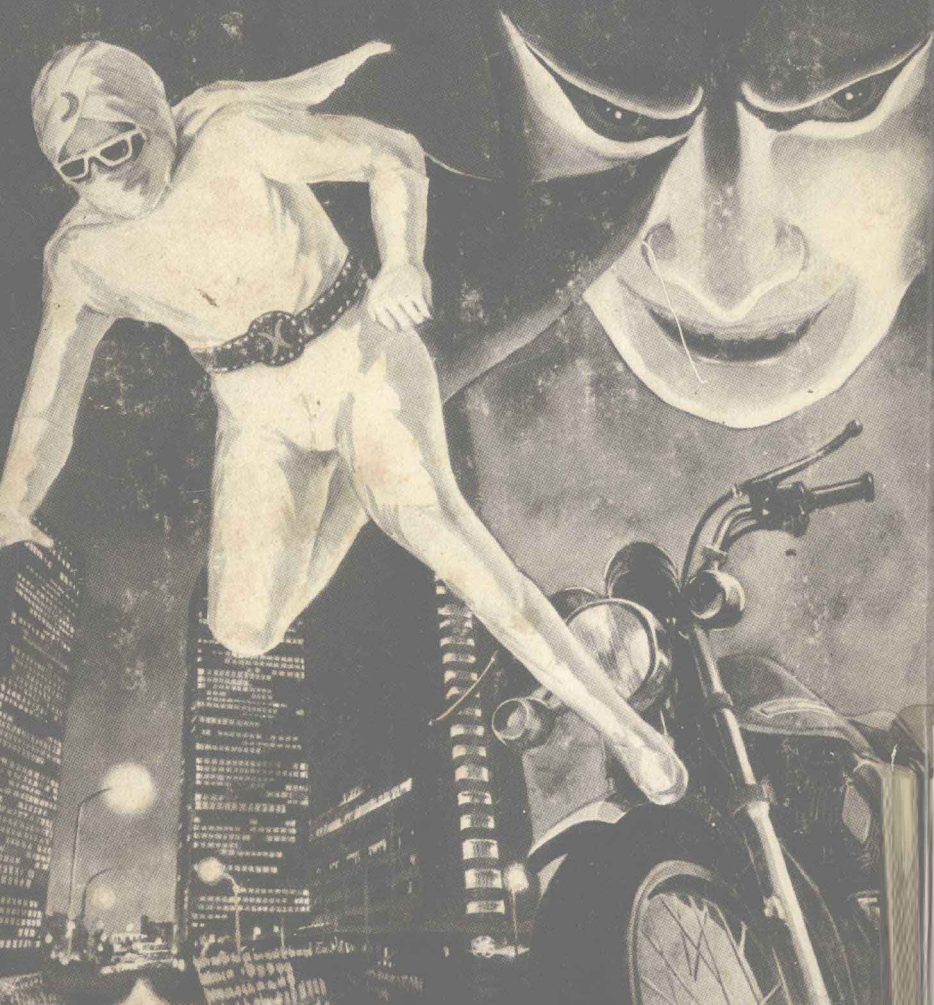


月光仮面

魔人(サタン)の爪 川内 康範



月光仮面

魔人(サタン)の爪 川内 康範



月光仮面 魔人(サタン)の爪

月光仮面シリーズ

著 者 川 内 康 範

発 行 者 櫻 井 義 晃

発 行 所 廣 濟 堂 出 版

東京都千代田区飯田橋
2-4-3 日吉ビル
電話 03-263-0781 (代)
振替 東京 164137番

印 刷 所 廣 濟 堂 印 刷 鑿

©1976 川内康範

定価は、カバーに明示してあります。
落丁・乱丁本はお取替えいたします。

みなさんへのメッセージ

川内 康範
かわうち こうはん

月光仮面が、日本ではじめてのテレビ映画としてTBSから放送されたのは、昭和三十三年の一月からです。

もっと正確にいうと、その前にラジオドラマとしてラジオ東京から三十二年の九月ごろに放送されていたのです。

そのころ、日本はテレビ映画のほとんどをアメリカの輸入に頼っていました。まだ、経済的には今日の繁栄を迎えるにはほど遠い貧しさでした。したがって、世界に通用するドルの保有額がとてもすくなかったわけです。

そのドルを、アメリカのテレビ映画に支払っている。これは日本人としてたいへん残念なことでした。

当時のテレビ映画のスターは空飛ぶ超人、「スーパーマン」でした。

私は、日本でもなんとかしてテレビ映画をつくりたいと思っておりました。それも、「スーパーマン」のような超能力を持たない、人間臭い主人公で、正義を説きたい。

そうしたねがいがある正義の味方「月光仮面」を書くきっかけになったのです。

月光仮面の題名は、仏教に出てくる薬王菩薩の脇仏としてお仕えしている、日光、月光の二人の菩薩の中から月光菩薩をもじってつけたものです。

人間は、どんなに権力を持ち、又は仁徳をつんでも「正義」そのものにはなれません。人間は、神さまや仏さまのお説きになる愛や正義や真実を顕すための手助けしかできません。

つまり正義の味方しかできないのです。

その努力の積み重ねがこの世の中を美しい花園にするのです。

私は、そのねがいをこめてこの作品を書きました。また、この作品を書くにあたって、池俊之さんをはじめ、多くの方々が協力してくれました。

みなさんは、これからの日本を背負って立ち、やがては日本の柱になるのです。心の背骨の正しい人間になって下さい。「憎むな、殺すな、赦しましょう」がこの作品のテーマです。みなで手を取り合って、たとえ貧しくても、心の美しい人々の住む日本にして下さい。

月光仮面
魔人サタンの爪つめ
目次



鍵 かぎ の秘密 ひみつ を解 と く鍵 かぎ	ミイラ取 と りがミイラに	子供 こども が逃 に げた	狙 ねら いは胸 むね に	白 しろ 髭 ひげ 博士 はくし	水底 すい底 のからくり	アジト移 い 転 てん	迷探偵 めいたんてい 祝十郎 いわじゅうろう 憤死 ふんし か	みなさんへのメッセーじ
57	51	45	38	32	25	18	10	1





助手 じょしゅ テストに及第 きやうだい	62
ボーイにされた五郎八 ごろうはち	69
二人 ふたり の尾行者 びこうしゃ	77
他人 たにん のものは俺 おれ のもの	82
悪魔 あくま の呪文 じゅもん	86
サタンの嘲笑 ちやうしょう	91
明日 あした になれば	97
逃亡 とうぼう 成功 せいこう	104
月光 げっこう 仮面 かめん 爆死 ばくし か	110





捕 つか まえた者は殺 ころ せ	金 かね の魔 ま 力 りき	怪 あや しいガラス屋 や	祝 いわいじやう 十郎 ろう か金 かね か	賞 しょう 金 きん 五 ご 百 ひゃく 万 まん 円 えん	困 こま ったらとぼけろ	正 せい 義 ぎ は死 し せぜ	サタンの奸 かん 計 けい	ズドンと一 いっ 発 ぱつ
_____	_____	_____	_____	_____	_____	_____	_____	_____

171 164 158 151 145 138 133 126 119





拳銃対拳銃
けんじゅうたいけんじゅう

決戦近し
けっせんちかし

七号棧橋とは？
ななごうさんばしとは？

由、凶弾に倒れる
よし、きようだんにたおれる

海外逃亡
かいがいとうぼう

出発
しゅつぱつ

バラダイの廃墟
はらだいのはいきよ

バラダイの月
はらだいのつき

勝利の王冠
しょうりのおうかん

229 218 215 210 200 192 186 180 173



装幀・サシ絵
青砥輝実



月光仮面 げっこうかめん

魔人の爪 サタン つめ



名探偵祝十郎憤死か

晴れわたった秋空のしたで、東京の後樂園遊園地は、赤、青、黄いろ、むらさき、といった、色とりどりの明るさにいろどられて、こどもたちにまじっておとなもいっしょに遊んでいる。五郎八もその一人で、いろんな種類の乗物に乗るたびに、繁と木の実と同じく、童心にかえったようにはしゃいでいる。

カボ子とても同じである。木の実の手を引き、木の実が回転ボートに乗ればそのまわりを手をたいて走りまわり、レール・シュートに四人いっしょに乗りこんでは、キャアキャアとかん声をあげる。

もちろん、ほかにも子供づれは多かったが、その人たちにはおとな、といういしきがつよいのか、五郎八やカボ子のように、大きな声でさけんでみたり、とつぴょうしもない声を出して

笑ったりはしなかった。

はたから見ていると、かえって繁や木の实よりも五郎八やカボ子の方がたのしそうである。遊びつかれた四人は入口近くの青くぬられたベンチにこしをおろした。

「ああ、いい気持だなァ……」

五郎八ダンナは大きく背のびして、空をあおいだ。

白い、ふんわりとした雲が、まるで綿菓子のように浮かんでいる。

「あたい、のどがかわいちゃったわ」

と木の实がおませな口ぶりでそう言った。

「そうね、あたしも……ジュースでも買ってきましょうね」

と、気がるくカボ子が売店の方へ立っていった。その売店には、赤、白の小旗が客をよぶようにはためいているのが遠くからでも見えた。

カボ子を見おくっていた繁が、

「五郎八さん、ぼくおなすいちゃったな、お金もってる？」

と、五郎八のふところが心配だといわんばかりに言った。

「お金もってるかって？ なめちやいけねえ、よし、何でも買ってやるさ、アンパンかジャ

ムパンかクリームパンか、さア、何でも言いなッ」

と大変な江戸ッ子ぶりはつきしはじめた。

「サンドウィッチがいいよ、あついハムの入ったのが」

「えっ？」

「あたい、チキンライスがいいわ」

木の実もすかさずに言う。

さすがの五郎八ダンナも、眼を白黒して、

「チキンライスやサンドウィッチなんかここにはないよ、ここはパンだけだ」

「だって、サンドウィッチもパンのうちじゃない？」

「そりやそうだけどさ……まあ、待ってな、うまいものをたんまり買ってくるからな」

五郎八はカボ子のあとをおいかけるように走っていった。

そのとき――

ベンチのそばに、自家用車がすべるように近づくと音もなくとまった。その車の中から姿をあらわしたのはサタン一味の、マキとジョンの二人だった。

「坊や、いっしょにあそびましょう」

と声をかけるマキの顔を、ベンチにすわったまま見上げた繁は、

「いやだよ」

と、はきすてるように言いきった。子供心にもやはり眼の前に立っている女がふしんな者に見えたのだろう。

マキは、ジョンにチラッと眼くばせした。

「よしきた」

とうなずいたジョンは、いきなり繁の手をつかんで、

「小僧！ おとなしくついてこねえとしようちねえぞ」

木の実はそれを、眼の玉をくりくりさせて見ている。

「五郎八さーん！」

繁がさけんだと同時に、ジョンの大きな手が繁の口をふさぎ、マキの両手が木の実の口をふさいでいた。それは、あつという間の出来ごとだった。

自動車にはこびこまれる二人の姿は、誰にも気づかれなかった。

その時刻、横浜郊外の古い洋館の中にもうけられている「アジア民族研究所」の一室で、名探偵祝十郎はまんまとサタンの爪のわなにかかって、おそろべきおとし穴の中におちこんでい

たのである。

「いかなる名探偵でもこれでは手が出まい……」

と、おとし穴をのぞきこむサタンの爪の笑い声が、不気味に流れている。

かたわらに、れいこくなつらがまえで立っている殺し屋のサブーナの手に、自動小銃がにぎられていた。

サタンの爪の立っている床から、このおとし穴の中の水面までやく五メートル……祝十郎は首だけ出してその水面に浮いている。祝がいく度か足のさきをのばしてみても底につかないほど水の深さはかり知れなかった。

「祝十郎せんせい……もはやかんねんしたほうがよさそうですね、鳥ではない貴様に、その水面からここまでとび上がれなくて、フッハハハハ……」

まるで悪魔のように笑いつづけるサタンの爪の手には、二つの黄金の鍵がにぎりしめられている。

この二つの鍵と、自分の持っている鍵の三つを合わせれば、バラダイ王国の秘宝のなぞはとけるのだ。

「フッフッフ、祝十郎よ、地獄への土産にたのしい情報をつたえてやろう。それは、われわれ